

小学校 6 年家庭科

「これで快適！夏の暮らし～夏をすずしくさわやかに～」 (全 9 時間)

授業者 安達 聡子

実践の概要

家庭生活に対する考え方や自分の暮らしをよりよくしていくための工夫は人それぞれです。今回の実践では、「夏をすずしくさわやかに暮らすための工夫」をテーマに、それぞれが自分の生活を見つめ、仲間の考えも尊重しながらよりよい生活を目指して、実際に調べたり試したりするなどの問題解決的な活動を通して学習を進めました。また、学習のゴールとして、自分たちが調べた夏を快適に暮らすための工夫について実生活を支えている保護者に向けてプレゼンテーションするという機会を設定しました。このことによって、子供たちは、自分の取組に説得力をもたせようとしています。自分たちの生活の中で何気なくしていたことには根拠があり、理にかなったこととして昔から工夫されているということを実感しながら、自分で工夫をして生活することの楽しさに気付くことができるのではないかと考えました。さらに、効果とやりやすさという視点を意識させながら学習を進めることで、自分にできることを考えて実践しようとする態度を育むことにも繋がるのではないかと考え、実践を進めました。



保護者に向けてのプレゼンテーション



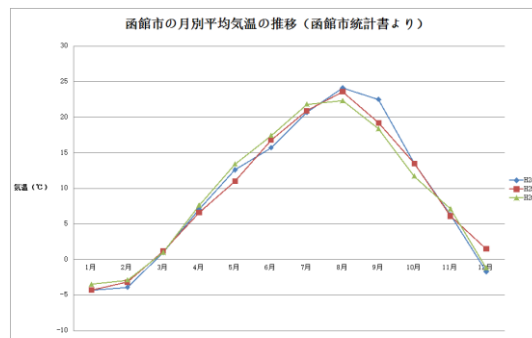
それぞれのプレゼンを効果とやりやすさの視点で分析

授業のねらいと展開

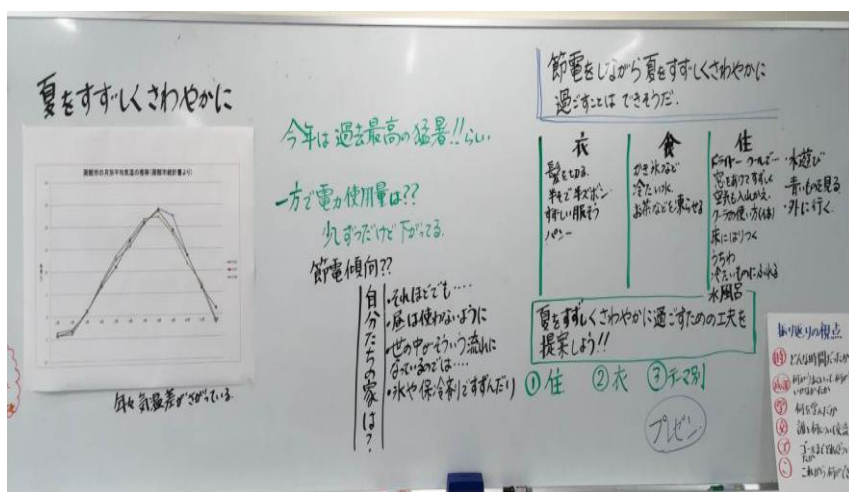
この題材では、衣服の着方や快適な住まい方の学習を通して、身の回りの快適さへの関心を高め、その大切さに気付くとともに、衣服や住まい方に関する基礎的基本的な知識及び技能を身に付け、衣生活や住生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度をねらいとしています。

また、この学習は、総合的な学習の時間などの他教科で培った学習の仕方を活用したり、実際の生活場ですぐに役立たせることができたりするため、指導要領にもある「実生活と関連を図った問題解決的な学

習」を実践しやすい題材です。だからこそ子供たちの学びに一層切実感をもたせるために、題材の導入の切り口を十分吟味しました。子供たちの暮らしに直結した資料として、函館市の過去数年の気温の変化とエネルギー消費量の推移を活用しました。函館市の夏の気温は30度を超えている一方で、電気消費量は減少傾向にあります。このことから、省エネルギーな暮らし方などのライフスタイルの変化に気付いていきます。「自分は」また、「自分の家は」どのように省エネルギーで快適な暮らしをしているのかに目を向け、夏の暮らし方の工夫について衣食住の視点から仮説を立てていきました。



函館市の月別平均気温の推移



課題を見出すために子供たちの暮らしに直結した資料を活用した板書

題材構成としては、前半は「通風・換気及び採光」について学ぶ「住」と、素材やデザイン、手入れの仕方などについて学ぶ「衣」は共通の課題で学習し、後半は子供たちが自分で考えた夏をすずしくさわやかに暮らすための工夫について、それまでの学びを基に調べたり試したりしながら検証していくという二段構えの構成にしました。この構成により、子供たちが自分の考えた方法で課題を解決する力を育むことができると考えました。

また、問題解決的な学習を展開する上で大切なことは、子供たちが学習の流れをしっかりと見通していることです。そのために、題材の導入では、以上のような学習計画を主体的に立てていくことができるよう子供たちと、「衣」「食」「住」と「すずしくさわやか」の繋がりの優先順位に着目させるなど、意図的な対話を積み重ねていきました。このようにして学習の見通しをもった子供たちは、自分を見つめ、自分の家庭を見つめながら学習のゴールであるプレゼンテーションに向けて学びを進めていきます。教師は、子供たちが追究の過程で分かったことや気づいたことなどを、できるだけ丁寧に子供たちの言葉で引き出したり、子供たちが検証結果を客観的に見つめたりすることができるよう、意図的な対話を積み重ねていきました。それが、家庭科で大切にしている実感を伴った理解に繋がっていくと考えます。

視点1:学びの文脈のある単元を構想する

視点1 学びの文脈

問題提起を工夫

学びの連続性・必要性・関連性

暮らしの中の「え、そうなの？」「なぜだろう」「どうすればできるかな」「思っていたのと違う」・・・を引き出す。

【例えば・・・】

- 資料の活用で学習の見通しをもつ
→ 今回だと函館市の最高気温と電気使用量の推移や徒然草55段
- 具体物の活用で想像から実感へ
→ 子供たちが毎日着ているボロシャツや夏野菜などの検証するのに使った物
- 予定不調和こそ学びを深めるチャンスが
→ 「思っていたのと違う」結果が、「方法を変えよう」「道具を変えよう」など多面的に見つめるきっかけになる

問題の解決

Page • 2

本実践における「学びの文脈」のイメージ

子供たちが主体的に学びを進めていくために大切なのは、問題提起の仕方とゴールイメージの設定です。それはこの2つが、その後の学びの原動力となるからです。ですから、題材計画を考える中で、子供たちの反応を予想しながら、子供たちが主体的に学んでいくことができるよう、左のような仕掛け

を考えていきました。どれも特別なことではありませんが、その中で絶対に必要なのは、子供たちとの対話です。子供たちの気付きや生活経験から知っていること、新たな学びなどをどれだけ丁寧に引き出せるかです。このことが、実感を伴った理解に繋がり、自分の取組の自信になり、次の学びの見通しへとなっていきます。



協同的な学びにつながる自主的・主体的な実験の様子

視点2：必要感のある協同的な学び

視点2 必要感のある協同的な学び

プレゼンテーションの位置付け

【どんなゴールを設定するか】

子供たちは、問題提起の工夫と学習のゴールに設定したプレゼンテーションの位置付けで学習の大まかな見通しをもつことができる。情報収集や検証、情報や実験結果の整理・分析、プレゼンの準備等の活動を見通し、子供たちは、1人ではなく複数の仲間を求めていく。

また、プレゼンテーションをする対象に実生活を支えている保護者を交えることで、自分の学びにより説得力が必要になる。

子供の思考をゆさぶる発問

【「それってつまりどういうこと？」「じゃあ涼しさって何？」】

子供たちは、調べたり試したりするなどの学習活動に自主的・主体的に取り組む。情報を集めたり実験などの検証結果から結論を導き出したり、予想していなかった結果が出たりした時などにどんな言葉をかけるかによっても必要感のある協同的な学びにつながる。

Page • 3

本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

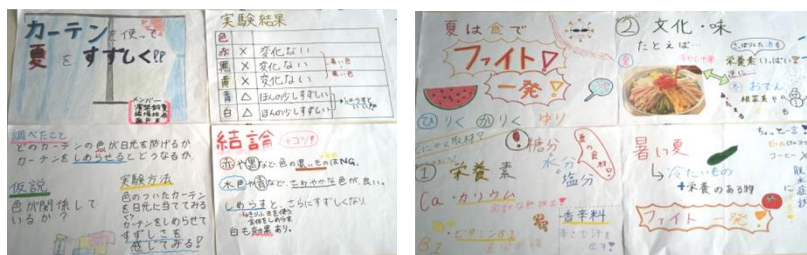
家庭生活の仕方には正解がありません。だからこそ、もっている知識を活用して、そこからよりよい生活を導き出していくことができる創造力と応用力が必要です。それは、多様な人と気付きや考えなどを出し合い集合知が得られる協同的な学びによって身に付けられるものです。

協同的な学びを引き起こす支援として、今回はプレゼンテーションを位置付けました。プレゼンテーションは、発表と違い内容に説得力が必要になります。限られた時間の中で自分たちの学びにより説得力をもた

せるためには仲間の力が必要です。さらに、保護者にも参加してもらい、夏をすずしくさわやかに暮らすための工夫を審査してもらいます。そうすることで、「やってみたい」「おもしろ

い」だけではなく、効果ややりやすさなど、実生活やともに暮らす人を意識した必要感のある追究へと繋がります。ここでも、どうしたら子供たちの思考を揺さぶることができるか、どのような対話をするかを常に考えていま

した。「もう一回やってみようよ」「違う方法でも試したほうがいいかな」「すずしさってどういうことだろう」など、子供たちが少しでも深く考え見つけることができるような対話による支援がやはり中心となりました。



プレゼンに向けて作成したストーリーボード



プレゼンの3要素を意識して伝える



自分の生活を見つめながら座標軸を使って分析

視点3：目的に応じた弾力的な振り返り

視点3 目的に応じた弾力的な振り返り

自分の学びを振り返る

【視点を明確にして振り返る】

- ・どんな時間だったか
- ・何が成功し、何がうまくいかなかったか
- ・新しく学んだことはあったか
- ・誰と交流したか
- ・どこまでゴールに近づいたか
- ・これから何ができるかなど、取組に合った振り返りの視点を選択する。家庭科以外の学習でも活用可能！

【自分の学びを振り返るには他者の目も必要】

交流の場や題材まとめ期の座標軸の作成など、様々な場面で自分の考えをアウトプットする場がある。その中で、仲間の反応など自分以外の存在を意識することで、子供たちの学びがより地に足の着いた家庭生活に寄り添ったものに近づいていく。

子供たちは常に自分を振り返りながら学んでいると考える。視点を与えたり板書やツール等で視覚化したりすることで、より自分の学びの自覚化に繋がる。



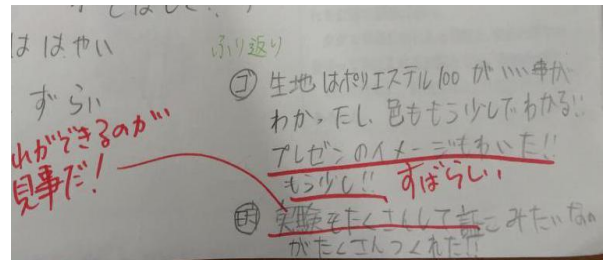
本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ(振り返りの目的と視点)

す。つまり、1 単位時間や単元のまとめ期だけではなく、単元や一単位時間のどの学習場面においても、子供の学びの様子を適切に見取りながら、学びを振り返るタイミングや視点、交流の必要性などを判断し、適切に振り返りをする場を設定していくことが大切だと考えたのです。

そこで、子供が自らの学びを、適宜振り返りながら学びを進めることができるように、振り返りの視点(上の図参照)を提示しました。そうすることで、子供は、自分の学びの状況を適切に振り返ったり、学びの進捗状況を見ながら時間を意識して学んだりすることができました。単元を通して振り返っていくこの視点は、家庭科の学習だけではなく他教科の学習でも活用することができます。

振り返りをすることは、グループや個人の学びの成果を実感することだけでなく、ゴールイメージに向かう自分の学びを見つめ直すことにも有効だと考えます。当然、教師は、子供たちが必要感をもちながら学び続けていくことをしっかり支えていく必要があります。それは、学びの文脈に即して(学習の目的に応じて)適切に学びを振り返ることができるよう支援することだと考えま

この視点に沿って、子供からは次のような振り返りの言葉が生まれてきました。



ワークシートに記述された子供の振り返り

【子供の振り返りの記入例】

「今まで考えたことがなかったけど、建物のつくりとすずしさの関係について深く考えることができた。」
「服の素材によって、こんなに乾く速さが違うことが分かった。」
「今日はみんなで実験をして、工夫の効果を確かめた。ゴールまであと半分。次からまとめ始める。」
「すずしく暮らすための工夫はたくさんあるけど、衣服の着方は自分でもできるからやってみる。」

次に、自分の学びの価値を自覚するために、それを客観的に捉えることが大切です。そのために、子供たちが協同的に振り返りを行うことができるように配慮しました。追究過程における自分の考えを交流する場や、プレゼンテーションを見合う場、まとめ期で座標軸を基に考える場（詳細は指導案を参照）など、仲間から意見をもらったり、仲間の考えを聞いて、自分の考えを述べたりする場を、意図的に設けたり自由に交流できる雰囲気をつくったりするなどです。そうすることで、「この工夫には、すずしさだけでなく健康でいられるという効果もあるね」「特別なことをするのではなく、毎日の生活の中で続けられるということも工夫するうえで大切なんだね」という子供の言葉に表されるように、自分の学びが日常生活において、実践することを意識した、より家庭生活に寄り添ったものに近づいていったのです。

授業者からのコメント

家庭科とアクティブ・ラーニング

家庭科は教科そのものに実践的・体験的な活動を通して学ぶという特質があります。家庭科の最終目標の「家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。」に向かうためには、この特質を無しにしての学びはありえません。さらに、そこにアクティブ・ラーニングになりうる仕掛けを設定することで、この「実践的・体験的な活動」がより効果的になるということを実感できました。

参会者からは、「活動がアクティブなだけでなく、頭の中がアクティブになっている子供たちの姿が伝わった。また、子供たちの姿からワーキンググループ（※）から出されている資質・能力とのつながりが見られた。」という感想をいただきました。

本校でおさえているこの構成要素（右図）は、家庭科という教科性から考えても、実に自然な学びです。今回の題材では、この協同的な学びと自主的・主体的な学びに支えられた課題解決型の学びによって、子供たちは自分たちの考えた課題解決の方法を通して、



図1 アクティブ・ラーニングの構成要素

「すずしさ＝体温の変化」ではなく、肌で感じる温度であることや、「すずしい感じ」という印象的なものなのだということを実感をもって理解していきました。そして、その学びが自分のためだけでなく、周りの人たちのためにもなるということを知るのも本質的な家庭科の学びです。これは、「自分だけのために行うのではなく誰かをハッピーにするため」という探究的な考え方もつながります。子供たちは、快適に暮らすための工夫は、たくさんあり、自分にできることもたくさんあるなど、暮らしの楽しさに気付いていきました。この「暮らしの楽しさ」こそが、生活をよりよくする実践的な態度へと結びついていくと考えます。



“校内のすずしい場所は？”調査を通じて日あたりと通風に気付く

今回の指導要領の改訂では、家族の一員としての自覚、異世代の人々とのかかわり、日本の生活文化がより一層重視されます。これらの学びの充実を図るためには、他教科との関わりも視野に入れながら、ICTの活用や人とのかかわりを大切にした授業を考えることが効果的だと、本実践を通して分かりました。これこそが、更に充実したアクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業づくりのコツと言えるでしょう。

※ 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 家庭、技術・家庭ワーキンググループ